

朝鮮戦争の長い影

「越北家族」女性たちのライフストーリー

曹恩 (チョ・ウン)

1. はじめに

朝鮮戦争と朝鮮半島分断は、南北離散家族という特殊な家族の範疇を作り出した。南北離散家族の中の分断線を超えて北朝鮮に移った家族（以下、「越北家族」と略称する）は、韓国社会では不可視の離散家族であった。¹ この論文は、これまで韓国社会で表面に出なかった越北家族の女性たちのライフストーリーに焦点をあて、戦争と分断の日常化を再照明しようと思う。南北離散家族は1千万人と推計されるが、このうちどのくらいが越北による離散家族であるのかは正確な推計が出てきていない。² 「越北家族」は単純に「北側に地理的に移動した者たちの家族」を意味するのではなく、「北朝鮮を選択した人々」の家族、すなわちアカの家族という社会的記号になってきた。（金貴玉、2004）その上、北側に生存しているかもしれない越北者の家族はアカの家族の中でもっとも危険視された家族だった。反共と容共、「反共主義者」と「アカい人種」に二分された社会で、越北家族は一種のタブーに巻き込まれた家族だった。（金東椿、2005）当然に越北者の存在は家族内でさえ消されたり隠蔽されたりするが多かった。（チョ・ソンミ、2002：Lee,2006）

越北家族が大挙してオープンにマスコミに姿を現したのは2000年第一次南北離散家族再会が成功したときであり、社会科学の領域で越北家族と越北家族の女性たちの研究も、このとき初めて登場した。越北家族や越北家族の女性たちの物語は韓国社会の代表的な沈黙の領域でありながら、同時に新しい読解が必要な史料の報告でもある。沈黙と省略は、虐殺と報復が繰り返される極端な形態の暴力を避けて戦争から生き残った人々が体得した「生存戦略」であり、冷戦文化が教えてくれた「知恵」である。特に女性たちの沈黙は彼女たちの記憶の方式であると同時に、語りの方式でもあった。（キム・ヒョナ、2004 / パク・チョンシク、2003 / ヨム・ミギョン、2003 / ユン・テンニム、2003）

この論文は『朝鮮戦争と口述史』プロジェクトの一部であり、越南家族と越北家族の口述史を採録する過程で注目することになった越北家族の女性たちのライフストーリーである。³ 越北家族の女性たちは越北

1 南北離散家族とは『1945年9月以降、動機は如何を問わず朝鮮半島の南北地域に分離された状態で居住している者とその子どもを指し、ここには戦争によって発生した失郷民と拉北・越北者と北韓離脱住民などを含む』と統一部(2001)は定義している。この間の離散家族研究は主に越南家族がその対象であった。（金貴玉、2002,1999 / イム・スニ、2001 / イ・ヨンギ、1998）この論文において越北者は1945年解放以降、朝鮮戦争前後の時期に38度線および休戦ライン以南から以北へ行った者を指し、越北家族は南側に残された越北者の家族のことを言う。これと対称の概念として越南者家族（以下、越南家族と略称する）がある。この論文では越南家族は南韓の越南者の家族、越北家族は南韓に残っている越北者の家族を指しており、「越南家族」と「越北家族」は韓国社会で社会的に構成された家族であり同時に対照点にある社会的記号でもある。

2 「越北移動」については政府当局と学者間に概略的推算における差異があるが、政府当局は戦争期の拉北要人8万4千人以上と、義勇軍徴兵者20万人以上など、「強制拉北者」が約30万人だと主張したことがあるが「自発越北」については言及していない。 權 泰煥 (Kwon, 1977) は、戦争前の「自発越北者」5万人以上と戦争期の越北・拉北者30万人以上など、全部で35万人程度が自分の意志、あるいは他者の意志によって越北したと推算したことがある。

3 越南家族と越北家族の口述史プロジェクトは2005年度韓国学術振興財団の支援 (KRF-2005-079-BS0063) を受け、ここで活用した事例は2006年1月から1年6ヶ月に渡って深層面談をした越南家族14、越北家族14事例のうち、口述者が女性

者の母、妻、娘、または姉と妹、孫娘であり、ここに紹介した事例は越北者の妻と妹、そして娘と孫娘などのライフストーリーである。この4つの事例は類型的事例として越北家族の女性たちという共通点と世代の異なる女性たちという差別性を持っており、これらの話者はそれぞれ違った視点から朝鮮戦争と分断の日常を証言する。⁴この原稿では、この人たちのライフストーリーを通じて、ある事実を発見したり理論化を試みたりすることよりは、朝鮮戦争と分断の日常化の一断面を生々しく記述しようと思う。

越北者の妻であるAさんのライフストーリーは苦勞して口述・採録することができた。Aさんは今までただの一度も公式に外に顔を出したことがなく、筆者とのインタビューは家族以外の人と会って夫について「生まれて初めて話してみることに」であった。ある話は『息子、娘にもしたことのなかった話』だと語ったこともあった。Aさんの長女は10歳のころから結婚するときまで、息子は小学校3年生からずっと監視と査察に苦しめられながら生きてきたので、子どもたちができるだけ父について知らなければ、呼び出されて取調べを受けても「ひたすら知らない」と言えるだろうと考えて、Aさんは無条件に口を閉ざして生きてきた。Aさんはこれまでの間に調査を受けた過程を、時にはぼんやりした表情で、時には手を振ったり涙を流したりしながら記述し、いくつかの場面はあまりにも生々しくて研究者が吸い込まれるような気持ちになるときもあった。Aさんは口述している間、『私、どうかしたみたい。こんな話をするなんて』と言いながらずっと口述自体を負担がったが、3時間を超えてインタビューをおこなった。兄が越北者であるBさんは、KBSアナウンサーであり第一次南北離散家族再会時に予期せず兄が現れて話題になったケースで、苦勞なくライフストーリーを口述採録することができた。三つ目の事例であるCさんは越北者の娘である。越北者の妻としてCさんの母をインタビューするために連絡したのだが、Cさんが『母は言うことがありません』と面談を拒絶する役目を母と筆者の間ですることになり、母の代わりに面談に応じてくれた。6・25(朝鮮戦争勃発)当時3歳だったので戦争当時ははっきりした記憶がないが、母と祖母を通じて話を聞いて育ったので、家族史と生活史を比較的くわしく口述した。4つ目の事例であるDさんは祖父が越北したケースであり、「越北者の息子である父」の娘として生きてきた話を口述した。

この論文は、事実上、筆者が著者だというよりは、この4人の女性たちが共同筆者だといえる。⁵

2. 戦争と分断の日常化と越北家族の女性たち

1) 越北した社会主義者の妻：『私はかまわないけど孫は駄目だ』

①家族史

Aさんは1919年生まれで、解放になる2年前の1943年に、当時の朝鮮電気株式会社に通う将来有望な青年と結婚した。Aさんの夫は抗日独立運動とともに社会主義運動に関与していたが、Aさんは「そんなこと」はよく分からなかった。Aさんの夫は解放空間で名前を告げれば分かるくらいの南朝鮮労働党の幹部であり、1947年「自発的な越北」をした。朝鮮戦争が起こったとき少しの間、南に戻ってきて、9・28収復

であると同時に類型的事例を示した越北家族たちである。

4 「類型的事例」とは、該当口述調査に参加した諸事例の「平均的、または普遍的な」特性を示している事例、あるいは関連した特定の社会集団を「代表」する事例ではない。「類型的事例」とは特定の時空間で生きてきた具体的な個人の事例であり、同時にこの事例の複合的な行為の展開過程が他の個人の生涯史にも発見されうる可能性を持つという意味で典型的特性を持っている事例なのである。(イ・ヒヨン、2005a:19)

5 筆者は彼女たちの話を引き出し聞きとる役割をしたのであり、口述した女性たちはオープンにそれらの話を明らかにすることに負担を感じているので、共同著者としてすることができなかった。

(訳注:1950年9月28日に国連軍(米軍)がソウルを占領したことを指す。)直後に再び越北した。娘2人、息子1人があり、婚家は湖南の伝統的ヤンバンの家で、大地主だった。夫が『あんなふうになった後』、故郷の財産もみな無くなって、Aさんは故郷から近くのK市に出て行商をして子どもたちを育てた。Aさんの家は、夫のみならず義姉と義妹も越北し、実家の妹と弟もいっしょに越北した、いわゆる「アカの家」である。Aさんの夫は北側で南労党系の人々が粛清されたとき政治犯収容所に送られた。国際アムネスティ報告書によれば、北韓政治犯収容所の最長期服役囚として知られた人物である。さらにAさんの末の叔父は夫より一歳上だったが、日帝下で社会主義者の労働運動家として広く知られた人物であった。この伯父は、解放空間でAさんの夫といっしょに活動し、いっしょに投獄され、朝鮮戦争中に射殺された。したがってAさんのライフストーリーには「叔母さん」という夫の叔父の夫人の話もよく登場する。Aさんのライフストーリーは大きく分けて、解放空間で獄中にある夫の世話をした話、朝鮮戦争時に夫との再会と離別、そして持続する監視と査察、この3つの部分で構成されており、もっとも多くの部分は査察と監視に関する話であった。AさんとAさんの息子がどこかへ呼び出され審問を受けたあとには、すぐに大規模スパイ団事件が発表されたりするので、この母子は自分たちが呼び出されれば『ああ、また「スパイ団事件」が起こるだろうな』と思いながら暮らした。引越しをすれば誰かがすでに知っていて新居を訪ねてきた。Aさんは呼び出されればいつでも『夫にいつ会ったか…』という脅しで審問が始まった。Aさんが言えることは『私はいなくなった人のことは知りません』との言葉だけだった。『そう言ってもどうしようもない…話さずすれば今すぐ帰らせてやろう』。このように言いがかりが付けられ『それでも私は知りません』と言えば『バンッ…と机を叩きながら、あれを見てみると』。そう言いながら首が入るくらいの丸い紐を出して見せて、『あれに入ったら分かるのか』と脅した。そうするとAさんは、ぶるぶる震えながら、『罪もないのになぜこんなことをするのか、私に何の罪があるのか』と、ようやくそれだけ言い返した。そのとき決まって出てくる言葉は、『お前のどこが罪がないものか…そんな夫とお前が暮らしたのが罪だ』という脅し文句だった。Aさんの息子は法学部に行きたかったが、連座制(訳注:(縁坐制)犯罪者と一定の親・姻戚関係にある人にその犯罪の連帯責任を負わせる制度。日帝支配下でも悪用され、1980年全斗煥政権下で完全に廃止されたとされるが、実際にはその影響は長く残った。)のために国家試験に合格できないのが明らかだったので工学部に進学した。Aさんは息子が『ともかく飯を食べていけるように』工学部に進学するように指導してくれと、高校3年生のとき担任の先生を訪ねて懇願した。夫が行った道については何の言及もしようとしなかった。ただ夫について『みんながいい人だと言うし…息子はお父さんに似て、人を助けるのが好きだ』と言う言葉で代えた。

◎ライフストーリー：『すっかり話して、そして忘れて、そのまま死ねたらいいのに』

Aさんの家には、この間、夫の写真もなかった。最近になって親戚のある人が若い頃のAさんの夫が写っている写真を一枚渡してくれた。日帝時代から抗日運動をしながら追われて暮らし、解放政局でも追われる身なので写真を全部無くせと言って、家族写真一枚残しておかなかった。『子どもができた時でも私が写真を撮りに写真館に行こうって言うと、行かない、絶対に行かない。それでも私は分からなかった、ポカンとして。うん…うちの子供たちだけ自分が背負って行って写真を撮ったんだよ。家族写真も撮らなかった。』といいながら、「夫が写っている家族写真がないこと」が恨(ハン)だったのか、夫の写真がないという話を非常に長く話した。

Aさんがいちばん大事にしている持ち物は、夫が追われながら持ち歩いてきた旅行カバンだ。『出張するとき、いつも持ち歩いて。このカバンに下着をみな入れるっていうんだよ。それでここに下着を一つ入れておいたよ。ところがカバンを置いて出て行って、帰ってこないんだよ。どこに行ったのかも分からないし。自分たちは遠いところに行くって。もう自分たちを探そうとせずに、泣かずにお父さんお母さんにお仕えし

て元気に暮らせて。そして叔母さんと元気に暮らせて。そういいながら忙しいって、バタバタして出て行ったんだよ。』Aさんの夫はその瞬間にも、叔母さんと仲良く暮らせという言葉のを忘れなかった。AさんとAさんの叔母さんは日帝時代に、叔父と甥の関係だった二人の夫が監獄にいるときにも拷問で血に濡れた夫たちの服を持ってきていっしょに洗って、いっしょに獄中生活の面倒を見ながら暮らした。

Aさんは口述中に夫と最後に別れるときどうだったかを問うや『2年後に会おう…だからそうだとばかり思っていた…』と言葉尻を濁して『こんな話をしてもいいのか』と聞き返した。Aさんは『夫に関する記事や書類のようなものはどんな場合も見ない』と言った。『徒に知ってしまって、万一私が捕まって責められたら、知っていたらしゃべってしまう。そうしたら子どもたちがひどい目に会う』のが明らかだったからだ。しかしながらインタビューを終えるとき、長い沈黙の重荷を下ろしたように『すっかり話して、そして忘れて、そのまま死ねたらいいのに』という言葉で話を締めくくった。

Aさんは、はなはだしくは『光復会のようなところから』日帝時代に夫の抗日運動の功労を認めてやるという連絡があっても、息子に『そんなもの欲しがるなって…絶対するなって…わたしが死んだらやれ…いっそ私が死んでしまって、もう居なかったらやってもいいけど、今は駄目だ』と釘を刺してある。Aさんは『私がかまわないよ…だけどうちの子供たち、孫は駄目だ…そんな苦難にあってはいけない』だから絶対に彼女の孫たちにお祖父さんの話をしてやらなかった。Aさんの夫の話は家の中で徹底してタブー視された。Aさんの孫たちは少し前まで、お祖父さんは浮気をして別所帯を持って戸籍まで持って行ってしまった人だと思っていた。Aさんがあんまり頑強に口を閉ざし、家の中で緘口令を敷いたからだ。Aさんの夫が北朝鮮側で死亡したという国際アムネスティ報告書が出てからは安企部や警察からの査察が無くなった。Aさんの息子はごく最近になってようやく『子どもたちも十分大きくなったから』知ってもいいだろうと、ある日お祖父さんが越北したという話をした。彼らが33歳と35歳になったときだった。Aさんの息子は父のせいで本人が苦労したことはそれでも我慢したが、子どもたちにまで荷物を負わせたくなかった。それで娘が大学に通っていたとき、総学生会（訳注：全学自治会）の会長に立候補するのを懸命に引き止めた。理由を言わず、何が何でも駄目だと妨害する父の反対を娘は理解できなかった。それで父と娘との葛藤が酷くなり、父娘はしばらく互いに口もきかないほどだった。Aさんの孫娘が通っていた大学は1990年代初め、韓総連（訳注：韓国大学総学生会連合）集会の中心にあり、『連日、不純勢力の背後操縦説』が新聞の話題に上っていたときだった。小学校3年生のときから警察署に呼び出され、大学の専攻もいちばん非政治的な工学を選んだにも関わらず、博士学位さえ終えることができなかったAさんの息子としては、もしかしたら娘が『アカの家』の子孫として『ある事件』に関連させられるかも知れないと思って、絶対に『前に出るな』といいながら総学生会選挙のあいだ自宅に軟禁して妨害した。そのとき娘は、父が女だから険しい運動の世界に出られないように妨害したものとばかり思っていた。娘が家出して子どもを産んだ先日、Aさんの息子は娘が嫁に行くときにもしなかったお祖父さんの話を打ち明けた。『娘はただ涙を流してばかりいた。』Aさんの家では、孫は社会科学ではなく工学部に進学するように誘導したが、孫娘は女なので政治学科に行くといったときあまり反対しなかった。総学生会長にまで出馬するようになるとは思もしなかった。

2) 透明人間：越北者の妹

①家族史

Bさんは1948年生まれで地方CBSのアナウンサーの出身だ。CBSに入るとき、越北した兄のために問題が起こる可能性があった。だが、地方で父が有力者だったし、中学校のときから学校放送で活動していたので、父の友人だったその地方のCBS局長が『学校さえ卒業すればうちの放送に来るのだ』と目をかけ

てくれて採用された。そして能力を認められてソウルCBSに移ることができた。ところがソウルCBSに来るとすぐに一月に一回ずつ必ず情報系の刑事が行き来するようになった。出勤するときはまず放送局の近くの喫茶店に寄って出勤したと分かるようにしてから会社に行った。『放送局の2階に喫茶店があるのですが、そこで刑事が待っているの、下りて行って点呼をしてから戻らなくてはいけなかったのです。お茶を一杯飲んで。会社には話しませんでした。親しい先輩1人くらいだけが知っていました。』結婚したら解放されると思っていたけれど、そうではなかった。結婚して子どもを産んだあとでも、いつも来て「変わりないか」「なんか消息はないか」と尋ねた。連座制が廃止されるまで、どこかに行って兄さんの話をすることもできなかった。1983年8・15のときに国内離散家族の再会番組の進行役をしたことがあるのだが、そのとき『自分も離散家族』だというアナウンスをしたが、兄さんが越北した離散家族だという事実は誰も知らなかった。Bさんの兄が2000年第一次南北離散家族再会のときに南側に姿を現したとき、初めてBさんはカミングアウトした。

Bさんの父は事業をしてそれなりに暮らした。その狭い地域社会で財力もある有力者として知られていた。しかし戦争中に『息子がなくなったので、巫女さんと呼んで儀式をし、うわさを頼りに探すのにお金を使い、養子を取り…』そのようにして財産をほとんど無くした。

Bさんは3女1男の末っ子だった。Bさんの父は1966年68歳で亡くなり、母は1986年80歳で亡くなった。Bさんの父はBさんに、長生きして兄に会わねばならないということと、兄の代わりに家に伝わる土地や山の管理を担当することを密かに頼み、祭祀をするときの紙位牌の書き方やたたみ方、祭祀のやり方まで教えた。Bさんの兄はBさんより15歳上で、上に姉2人、下に妹1人がいる家の唯一の息子であった。『兄さんを探すための両親の徹底した努力』は言うまでもなかった。『家にはじめから巫女が来て住み、儀式もするし、日本に人も行かせた。』代が途絶える、と父は焦り気をもんだ。だからBさんは『幼いとき遠足に行く前日を除いては(遠足に行く前日は雨が降らないようにしてくださいと祈り)毎日、トイレで(静かな空間だから)男に生まれさせてくれと祈った。』

Bさんは兄さんが義勇軍に捕まって連れて行かれ巨済島に収容されて越北したものと思っていたが、兄さんは2000年にソウルに来て『自分が望んで越北した』と語った。そのときまでBさんの兄はこちらの戸籍に名前が残っていた。Bさんの家族は、50年間待っていても消息がなかったが失踪届けは出さず、戸籍からも無くさないでそのままそのように過ごしていたが、2000年2月頃ははや亡くなったものと考え、郡山(クンサン)地検に失踪届けを出したが7月になっても処理されない状態で兄が現れたのだった。

②ライフストーリー：『何も隠すもののない透明人間』

Bさんの両親と姉妹たちは『寝ても覚めても兄さん』のことを思って暮らした。そんなある日、朝鮮戦争のときになくなった兄から一通の手紙が配達されたとき、家の中はにわかの大騒ぎとなった。『鎮南浦から密航船で日本に行って、そこで勉強している』という兄の手紙だった。

Bさんの話は、物心ついたときから彼女の家には越北した兄のせいで常に情報員が常駐していたという話と、両親が兄を探すためにした努力、そして南北離散家族の再会のために現れた兄の話が主要な軸を構成した。『2歳あるいは3歳、そのくらいになったときなんだけど、ある瞬間、事物を認知するときから、私の家にいつも、今の国家情報院—その当時は特務部って言いました⁶—特務部の人たちが我が家に来ている

6 一般人は混同して使用しているが、もともと中央情報部は朴正熙の軍事クーデター以降、1961年に金鍾泌(キム・ジョンピル)によって初めて作られ、その後、国家安全企画部を経て現在の国家情報院に変わる。一方、特務部は「陸軍本部情報局防諜隊(1948年設立)」である。陸軍本部情報局防諜隊はその後「保安司令部」(1977年設立)、現在の「国軍機務司令部」(1991年以來)に変わるようになるので、国家情報院と特務部は系統が異なる。

んだけど、一部屋がその人たちの事務室でした。』と記憶している。そのときから彼女に誰かがいつも付いて歩いた。『だから自分は何も隠すことのない透明人間』だという言葉で話を始めた。

『私の家に来ていた特務部要員のなかの1人が傷痍軍人でした。だけどほんとにハンサムなお兄さんでジャージャー麺がすごく好きなんです。だからいつもお母さんがジャージャー麺をおごってあげました。それであだ名がジャージャー兄さんというんです。そのお兄さんが私を背中に乗せて肩車してくれながら、知らず知らずのうちに教育したんですよ。「兄さんが帰ってきたら知らせなくちゃいけないよ。」だから「あ、兄さんは悪いことはしてないけど、それでも万一こっそり帰ってきたら私は行って話さなくちゃいけない」そんなことをほとんど毎日考えた。だけどある瞬間、それがものすごく大きな葛藤になった。肩車もしてくれて、すごくかわいがってくれたから。そしてお母さんにも話をした。』『田舎の老人たちだから……もしかしてお母さんが万一隠しておいたら申告するよ。それが生きる方法だ』って。1人でずっと自問自答した。『そんなに大事な息子で、うちの両親があんなにも思っている息子だけど、他の人が隠したとしても私は話すだろう』って、いつも1人で繰り返し学習した。『すごく幼いときから……反共教育のせいもあって。とにかくそんなふうに教育されましたから。』

そんな兄が2000年、予想もできなかった一瞬にソウルのTVに登場したのだ。2000年第1次南北離散家族再会者の北側名簿に、Bさんの兄が北韓の人民俳優として掲載されていたのだ。7月17日の憲法記念日、祝日なので家で本を読んでいたのだが、姉さんから電話がかかった。『早くテレビを見てみる』って。KBSからも電話があった。Bさんの兄は、Bさんをアナウンサー活動のときに使う芸名ではなく本名で探していた。Bさんは「越北した兄」のおかげで隠すもののない透明人間として生きてきたが、アナウンサー人生でもっとも多くスポットライトを浴びることになった。Bさんは兄に会うことになったとき、外国で勉強している子どもたちに連絡した。彼らに母方の伯父のことを初めて長く話した。娘たちはただ「お母さん、うれしいだろうね」とだけ言った。

3) 越北した人民俳優の娘

①家族史

Cさんの父は朝鮮戦争が起こる直前に越北した。Cさんは1949年生まれで、上に兄が1人いたが、朝鮮戦争中に死亡した。Cさんの家はもともと開城^{ケソン}が故郷で、38度線が休戦ラインになったとき開城は北側に属すようになったのだが、そのときCさんの父は開城を選択した。Cさんの父は、三兄弟の中で1人だけソウルに残り、2人は北側に行った。Cさんの母は夫について北側に行かず、実の母とともにソウルに残った。Cさんの母は東大門市場で商売をして生計を立て、Cさんが大学4年生のときに再婚した。Cさんは主に母方の祖母の手で育てられ、家で父についての話はあまりなかったので父についてはよく知らず、父の家族についてもよく知らないほうだ。父の従姉たちが時々、父があるオペラを上手に歌ったとか、そんな話をしてくれる程度だ。

Cさんは結婚するとき、父の越北について婚家のほうで少し問題にするのではないかと心配したがそのまま過ぎた。仲人をした人が夫になる人に話したのだが、婚家の大人たちにまでは伝えなかった。夫だけ知っていて終わらせたようだった。結婚した後は夫が外国に行くとき問題になるのではないかとということが一番心配したがそんなことはなかった。娘なので大きな問題にならなかったようだといった。

②ライフストーリー：父についての記憶

Cさんのライフストーリーは、父についての記憶のほかには、越北家族の子どもとして特別な話はないと言った。母がもともと言葉数の少ない人で、父についての話もあまりなく、『娘だからなのか』監視を受けたり査察を受ける不利益もなかった。

Cさんは本人の戦争の記憶の代わりに、父が出てくる「以北放送」を、息を殺して聞いた話から始めた。『小学校6年生のときくらいから。以北放送を聞けば父の話が出てくるという話を誰かからちょっと聞いた。だから最初は捕まって連れて行かれたんだろうと何となく一人で考えていたが、高校生くらいになって、たぶん越北したのだろうと…。お母さんがどんな風に話したかといえば、越北したということは言わずに、あちらでは認めてくれたと、それであっちに行っただと…。』そんな話を聞いて胸にその話をしまっただけ誰にも話さなかった。Cさんは父が思想のためではなく、あちらで待遇してくれる人民俳優という職業のために越北したと解釈した。

Cさんの母は父について、ただ『まあ、お前たちのお父さんは現実的でない』と投げつけるように言った。そして父の越北についても詳しく話さず、『あちらでは認めてくれた』という話をした。

Cさんは友人たちに父についての話をしたことがない。北側については漠然と『お父さんが行ったのだからそんなに悪い世界ではない』と考えて暮らした。Cさんは幼いときから『テレビで…あのころはしばらく以北について皆飢え死にしていると騒いでいたけれど、あっちも人が暮らしているところだからそうではないだろう』と空想のように考えた。そう思いながらも、『ここよりは不便で性格的に合わないみたいだし、あまりにも人々が融通きかなくておもしろくないだろう』という程度に思っていた。『お父さんもはっきりとこっちの人なのに、いわば一番ブルジョア的な性格を持った人なのに、しかたなくあっちに行って暮らしているからあんまり合わないだろう』と言いながら、父は理念が合致して行ったのではないということを強調した。

『性格が以北に合う人、以北が合っている人がいるじゃないですか…だけどうちのお父さんの性格は、ここに合う人でした。はっきりとこちらがよく合って、こっちを望んだはずなのに、そんな色々な職業的な問題のために無理に越北したんだと…。』彼女なりに解釈した。

4) 「越北者の息子」の娘：父を拒否すること

①家族史

Dさんは1964年、済州島で出生した。朝鮮戦争が終わって反共捕虜の釈放があったとき、祖父が南側の家族を選択せずに越北したので、越北者の息子の娘、「越北家族」として育った。日帝のもとで日本へ渡って定着していた祖父は、1945年解放になるや否や『アカに染まって』故郷の済州島に戻ってきた。済州市からバスで約30分の距離にある故郷の村に製材所（訳注：当時、精米所や鑄造所とともにいくらか金の金のある階層の事業体の一つだった。）も作り、家も建てたが、済州4・3事件が起こる少し前『ここにいたら死ぬかもしれない』と家族を率いてこちらのほうに生活基盤を移した。そして朝鮮戦争が起こるとすぐに『いなくなった。』Dさんの家には、朝鮮戦争のときに越北した祖父以外に、越北した人がもう1人いた。父のすぐ下の弟である叔父は1975年に日本へ渡った後、越北してしまった。それでDさんの家は注目される「アカの家」になった。Dさんの父が一生懸命に働いて済州で一番大きいという畑を買ったこともあったが、金の出所を疑われて呼び出され後で釈放されたこともあった。Dさんの父は『まかり間違ったら濡れ衣を着せられる』という気がして大声を上げて騒ぎながら機先を制したところ二日で釈放された。

Dさんは幼いときから家で理念的葛藤を経験しながら育った。Dさんの実の祖父が越北したのに比して、母方の祖父は済州4・3事件のとき民兵隊をして村を守っていて竹槍で刺されて死んだ。だから母方の祖母

は軍事援護（訳注：国家の為に犠牲になった人に対する補償）の対象者になり、少しずつだが毎月生活費が出た。同じ村に住んでいた実の祖母は幼いときDさんに「おまえたちのお婆さんはいいな」というふう言い、母方の祖母の家に行けば母方の祖母が「お前たちのおばあさんは1人えらそうにして、賢いふりして、どうのこうの…」と言いながらおばあさんの悪口を言った。だが幼いときは4・3事件がどんなものなのか全然知らなかった。学校でも教わらなかったし、大人たちも話をしてくれなかった。父に一度4・3事件について聞いてみたが、『村が全部燃えてしまった』とだけ話して、他の話に移ってしまった。Dさんはしかしこんなことに関心を持ち続けなかった。自分の関心が向く分野ではなかったし、何よりも『毎日毎日生きていくことも大変で』そんな問題に関心を持つ暇がなかった。Dさんは1980年代初めに、済州大学の奨学生として大学生活を始めた。しかし、家にいるのがいやで、父と一つの家で暮らしたくなくて家出した。父は心臓病を発病してほとんど死にそうになったし、弟は高校に入ったが中退してしまい、父の農業もその年に駄目になった。Dさんは家出している途中で男に出会い、何の考えもなしに子どもを産んで家に帰ってきた。Dさんのすぐ下の妹はソウルの大学に行くとして出て行ったが、大学にも通わず再び戻ってきたし、Dさんは大学に通っていたが途中で辞めて結婚してしまった。こんなややこしい事情のために他のことを考える暇もなかった。Dさんの父は、子どもたちが大人になったらみんな自分に背くと言いながらいっそう厳しくしたり、子どもたちは皆外へ出てしまった。Dさんは『市内に用事があるって出かけた場合でも、昼食も食べないくらいお金も使わず、自分の目標を立てたら最後までやり抜く父』がほんとうにしんどかった。

②ライフストーリー：『中ほどを行けば死なない』

Dさんのライフストーリーは父との葛藤が大きな軸を成し、祖父の話、そして自身の複雑な生活について話で構成された。Dさんの父は、小学校4年生のとき戦争が起こったという話のほかには戦争についての話をほとんどしないほうである。ただある日、自分のお母さんが自分たち兄弟に黄色いハンカチと白いハンカチを用意してくれながら、巨濟島捕虜収容所の前で『お父さんが見るように』ハンカチを振らせていたことだけは話した。Dさんのお父さんは、自分の母が巨濟島捕虜収容所に閉じ込められていた義勇軍たちを北送船に乗せて北に送るという情報を聞いてきて『子どもたちを見れば（父は船を）降りるだろう』とお父さんたち兄弟3人にハンカチを作って振らせたが『お父さんは見なかったのかそのまま上がっていった』という話を短くしてくれたことがある。そして自分の父については『うちのお父さんは自分の理想のために生きてたけれど、そのために子どもたちに勉強の一つもさせてやれず、家族に苦労させた』という話を口癖のようにした。

Dさんの父は村の里長のようなものをしると思っても絶対にしなかった。『政治的に連座制みたいな考えのせいで色々頭の中が複雑で、子どもたちの勉強についても「英語なんか勉強したらだめだ」「英語科に通っていると職員として使いやすから北から連絡をつけてくることもある』』と言いながら大学の専攻を選択するときも干渉するほどだった。Dさんの父は、従弟の1人が「海洋大学に行けば外航船に乗れるし、そうしたら金をたくさん稼げる…と言って海洋大学に行ったのだが、卒業のとき国務総理賞をもらったのに連座制にひっかかって船にも乗れなくなってしまった」経験をくどくどと話しながら、Dさんを説得した。Dさんは『連座制という言葉が高校のときから聞いたように思うけど、なぜそんなことに神経を使わねばならないか、話にならない』と考えたが、父の意思に逆らうことができなかった。

Dさんの父は常に『人より優れてはいけない。一番は何であれ駄目だ。』『他人より一歩先んじてもいいけないし、一歩遅れてもいいけない。中間くらいで生きる』という言葉で座右の銘のようにした。せめてヘアスタイルを変えるくらいのことでも『友達が皆やったあとに、最後にやれ』というのだった。『どこかに行って銃を撃っても、中ほどを歩いていたら死なない。最後尾も死ぬし、先頭を歩いても死ぬから中ほどを歩け』

という言葉に耳にタコができるほど聞いた。そんな話をしながら暇さえあれば、『親になったら自分の理想と夢を諦めて家族のために生きなくてはいけない』という言葉をやつ文のように唱えた。

Dさんは済州4・3事件を研究し、社会運動にも熱心に参加する夫に出会って再婚したとき父の肩が少しづつ伸びるのを感じている。そして父をもう少し理解できるようにもなった。しかし、家の雰囲気が無性にいやで、辛く、居づらいのでたびたびは行かない。『妹も自分の姑とは一時間くらいお喋りをしても、うちの父とはお喋りができないんですよ。昨日も電話していて胸がぎゅっと塞がって電話を切りました。』と言った。そういいながら『私はお祖父さんのような人が好きです。自分の理想を持って、身を投じることのできる人。自分はそのように生きたい』と言った。しかし先頭には立てなさそうだと聞いた。

3. 朝鮮戦争、家族 そしてジェンダー

世代が異なる越北家族の女性たちのライフストーリーは、世代が異なるだけに「越北家族」として経てきた経験もまた異なる。しかし朝鮮戦争という事件と、理念的選択をした一族の「誰か」のために彼らが経た経験と傷は、世代を越えて続いている。これらの諸事例は、女性たちの話し方に現れた生存の方式のなかで、沈黙が韓国社会の支配的論説と結んでいる特殊性に注目させる。1980年代学生運動経験の事例のライフストーリーを再構成したイ・ヒョンは、解放後の韓国社会の公的な論説から排除された歴史的事件と体験についての疎通が家族という行為空間のなかで成されていることを明らかにしながら、左派性向の家族史の背景を持ったこれらの家族が、韓国社会の支配的な論説に完全に捕獲されず「政治社会化の場」として機能していると指摘する。(イ・ヒョン、2005b:128) 本研究の諸事例もまた、韓国の家族が「政治社会化の場」として機能していることを示しているが、これらの諸事例は「越北家族」が韓国社会の支配的な論説に捕獲されなかったというよりは、微妙なやり方で捕獲されていることを示している。

韓国社会は、集団的反共の精神的特性を作りだすほどに、戦争と分断が日常化された社会だった。(キム・ヨンヒ、2007) このような社会で、家族の中での戦争と分断の日常化が成し遂げられる方式に、より注目する必要がある。越北家族の女性たちのライフストーリーはこのような問題意識を解決する重要な端緒になりうるだろう。越北家族の女性たちの場合、男性たちよりは公共領域で公式的な統制をより少なめに受ける反面、むしろ家族という枠の中でより酷く苦しめられる。この中で彼女らは「血肉の情」と理念を分離させる生存戦略を駆使する。

越北家族の女性たちは、植民地経験と分断、政治的な理念対決による戦争と暴力によって刻印された韓国社会の複雑さを、世代を横断して、そして世代に沿って、異って現している。彼らの生涯と日常は、家族と理念の競合・拮抗関係の上に女性というジェンダー的位置まで加わっていつそう複雑な方式で構成されていることを示している。さらに朝鮮戦争の影が思いのほか長く深いということを示している。ここに出てくるライフストーリーが越北家族の女性の誰にでも見られる典型的な事例だというとき、彼女らが「語らないこと」や「全部さらけ出してしまうこと」、そして適当に隠したり、適当に抵抗したりする方式が持っている含意をより積極的に解釈する必要がある。この原稿は、戦争と家族とジェンダーが結んでいる関係についての、より積極的に緻密な解釈と分析作業のための前哨作業だといえる。

【永谷ゆき子 訳】

参考文献

- クワン・チファン
權泰煥、1977、Demography of Korea : Population Change and Its Components. 1925 ~ 66. ソウル大学出版部
- キム・グイソク
金貴玉、2004、『離散家族、'反共戦士'でも'アカ'でもない…』、歴史批評社

- 金貴玉、2002、『越南民の生活経験とアイデンティティー下からの越南民研究』、ソウル大学出版部。
- 金貴玉、1999、「下からの反共イデオロギー崩し—定着村越南者の口述を中心に」、『経済と社会』通巻43号（秋）
- 金東椿、2005、『戦争と社会—われわれにとって朝鮮戦争とは何だったか？』、トルベゲ
- キム・ヨンヒ、2007、「反共主義と日常生活」、『分断体制下の南北韓の社会変動と民族統一の展望』、延世大学校国学研究院
- キム・ジェヨン、1998、「離散家族問題の政治性と人道主義」、『歴史批評』、1998年秋号、歴史批評社、83—94頁
- キム・ヒョナ、2004、『戦争と女性—朝鮮戦争とベトナム戦争の中の女性、記憶、再現—』、ヨルムオンドク
- パク・チョンソク、2003、「戦争と‘アカ’についての集合記憶」、『戦争と人々』、ハヌルアカデミー
- ヨム・ミギョン、2003、「戦争研究と口述史」、『戦争と人々—下からの朝鮮戦争研究—』、ハヌル、15—46頁
- ユン・テンニム、2003、『人類学者の過去旅行』、歴史批評社。
- イ・スギ、2007、『この女、イ・スギ』、サミン
- イ・リョングョン、2003、「朝鮮戦争前後の左翼関連女性遺族の経験研究」、聖公会大学校市民社会福祉大学院修士学位論文
- イ・ヨンギ、1998、「離散家族研究はどこまで来たのか」、『歴史批評』、1988年秋号、歴史批評社、252—270頁
- イ・ヒヨン、2005a、「社会学方法論としての生涯史の再構成—行為理論の観点から見た理論的意義と方法論的原則」、『韓国社会学』39集3号、120—148頁
- イ・ヒヨン、2005b、「体験された暴力と世代間の疎通」、『経済と社会』68巻冬号、108—133頁
- イム・スニ、2001、「南北韓離散家族問題の現況と課題」、平和問題研究所、101—119頁
- チョ・ソンミ、2002、「越北者家族の生活経験と‘越北’の意味体系」、梨花女子大学校社会学科修士学位論文
- 統一部 人道支援局、2001、『南北離散家族交流協力実務案内』、pp.4
- ピョ・インジュ他、2003、『戦争と人々—下からの朝鮮戦争研究』、ソウル：ハヌルアカデミー
- Soo-jung Lee. 2006. MAKING AND UNMAKING THE KOREAN NATIONAL DIVISION: SEPARATED FAMILIES IN THE COLD WAR AND POST-COLD WAR ERAS, Unpublished Ph.D Dissertation. University of Illinois at Urbana-Champaign